

平成23年度 学術情報リテラシー教育担当者研修

2011.10.20. 大阪大学 / 12.1. 国立情報学研究所

教員と図書館員が連携する 学術情報リテラシー教育

長澤 多代

三重大学 附属図書館 研究開発室

本日の発表内容

1. 大学教育の質保証と大学図書館
2. 学生に対する学習活動の支援(学習支援)
3. 教員に対する教育活動の支援(教育支援)
4. 大学や教員のニーズの把握
5. 図書館員による教員へのアプローチ

はじめに

情報リテラシー教育のパラダイムの転換

図書館が関与すべき情報リテラシー教育

以前から実施してきた図書館利用法，文献探索法，データベース利用法を中核にした，学習・研究情報の探索・評価・活用・提示の方法

図書館内部の事情にもとづくサービスから，
図書館が所属するコミュニティの要請に対応するサービスへの転換

1. 大学教育の質保証と大学図書館

1.1 大学教育改革の背景

- 知識基盤社会の到来
- 学習成果を重視する国際的な動向
- 18歳人口の急激な減少
- 大学数の増加

知識基盤社会：

新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会

1.2 内部の質保証・外部の質保証

内部の質保証

自己点検・評価ができる大学へ

3つの方針の策定, PDCAサイクル

計画 (PLAN) : 各学部や学科で観点別に人材養成像 (DP), CPを策定・公開する。
実施 (DO) : 策定したDPやCPにもとづいて教育を実施する。
評価 (CHECK) : 教育システム, 学習成果等を検証する。授業方法, 成績評価基準やその方法に関する事項で, 観点別の学習の到達目標を備えたシラバスを作成して公開したり, 観点別の学習の到達目標ごとの成績評価基準を策定・公開する。
実行 (ACTION) : 評価結果にもとづいて改善方策を策定・実行する。

公的な質保証

- 事前規制→事前規制＋事後確認の併用
- 認証評価*

川島啓二, 沖裕貴, 佐藤浩章, 山田剛史「3つのポリシーをどう構築するのか? : 学士課程教育の一貫性」[高等教育開発セミナー]国立教育政策研究所, 2010.9.3.

1.3 3つの方針の策定

①学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー, DP)

②教育課程編成・実施の方針

(カリキュラム・ポリシー, CP)

③入学者受け入れの方針

(アドミッション・ポリシー, AP)

各学部や学科でどのような人材を育成するのか

e.g. [愛媛大学](#), [山口大学](#), [立命館大学文学部](#)

1.4 単位の実質化①

単位制度の趣旨

「学生がいかなる授業科目を選択しようとも、授業時間数を基礎に算出した単位数が同じであれば、学習内容・成果も同程度に評価する」

1単位

＝標準45時間の教室内外の学習を要する教育内容

1単位あたりの教室内の学習時間

講義・演習 15～30時間の範囲

実験・実技・実習等 30～45時間の範囲

1.4 単位の実質化②

「現在の単位制度は、教室における授業と事前・事後の準備学習・復習を合わせて単位を授与するものであり、学生の自主的な学習が求められる。このため、教室における授業だけでなく、授業の前提として読んでおくべき文献を指示するなど学生が事前に行う準備学習・復習についても指示を与えることが教員の務めである。」

「教室外における学習を徹底させ、学生が主体的な学習に十分取り組むことができるようにするためには、指導を担当する個々の教員の努力に加え、図書館の座席数や必読図書の所要冊数の確保、開館時間や開館日、貸出期間など施設・設備利用の面を含め、学生が学習する場としての大学の学習環境の整備にもこれまで以上に留意する必要がある。」

(大学審議会答申, 1998)

1.4 単位の実質化③

1単位は①と②の合計で標準45時間の学修を要する学習内容

① 教員が教室等で授業を行う時間

② 学生が事前・事後に教室外において準備学習・復習を行う時間

1単位＝標準45時間の根拠

8時間×5日(月～金曜日)+5時間(土曜日)

45時間＝1週間の学習時間に相当

1.5 学生の学習時間①

◆文部省の調査(1995年)

1週間の学習時間

	授業への 出席時間	その他の 学習時間	合計
全体	19.3時間	7.2時間	26.5時間
自然科学系	22.3時間	7.9時間	30.2時間
社会科学系	15.8時間	6.0時間	21.8時間

◆内閣府の調査(2001年)

「普段、学校以外で1日に何時間勉強しているか」

ほとんどしていない(47.5%)

約30分(12.2%), 約1時間(19.3%)

1.5 学生の学習時間②

◆総務省の調査(2006年)

1日あたりの平均学習時間(土日を含む, 平日のみ)

	小学校	中学校	高校	短大・高専	大学・大学院
学業の時間+学業以外の学修時間	5時間 17分	6時間 30分	6時間 23分	4時間 59分	4時間 4分
	6時間 55分	8時間 4分	7時間 42分	6時間 14分	5時間 1分
うち, 学業の時間	4時間 41分	5時間 35分	5時間 27分	4時間 27分	3時間 30分
	6時間 19分	7時間 10分	6時間 45分	5時間 41分	4時間 28分

1.6 初年次教育

目的：高等学校の教育から大学教育への
円滑な移行を図る

- “レポート・論文の書き方などの文章作法”
初年次教育科目の38.3%が導入
- 学生が獲得すべき技能について、学部長の
期待度が最も高いのは、基本的な学習スキル
「レポート・論文の書き方などの文書作法」
「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」
「図書館の利用・文献探索の方法」など

1.7 大学教育の質保証への対応①

大学教員の役割

- ・教室内外で双方向性のある学習を設計する。
- ・授業外学習(予習, 復習, 課題)について,
シラバスで十分な指示を与える。

大学の役割

- ・履修制度の上限を設定する(キャップ制)。
- ・成績評価を厳格化する。 e.g. GPA
- ・授業外の学習環境(図書館などの物理的環境,
eラーニングなどの仮想的環境)を整備する。¹⁴

1.7 大学の質の保証への対応②

大学図書館の役割

学習成果の向上

初年次教育科目における図書館ガイダンス
科目関連の情報利用指導(科目関連指導)
パス・ファインダー

授業外(教室外)の学習時間を確保するための学習支援
環境の整備

ラーニング・コモンズ

FD(ファカルティ・ディベロップメント)等による教員の支援
FDのアプローチを取り入れた教育支援

SD(スタッフ・ディベロップメント)等による専門性の向上
求められる専門能力の検討と資質開発

2. 学生に対する学習活動の 支援(学習支援)

2.1 科目関連指導とは

- 科目関連指導 (course-related instruction)

「ある学科目の学習・研究の課題において必要とされる情報探索法・整理法・表現法を学ばせる指導方式を指す。通常、教員から要請されて図書館員がその授業時間の一部を使って指導を行う。」

『図書館利用教育ガイドライン』1998

2.2 科目関連指導の到達目標

- 学生が，図書館や図書館員が自分たちの学習活動を支援する機関（職員）であることを認識する。
- 学生が，情報を利用するプロセス（情報探索，情報整理，情報表現）の全体像を理解する。
- 学生が，情報を探索するのに有用な道具（目録やデータベースなど）を理解し，利用できる。

2.3 科目関連の情報利用指導

説明	授業の一部を用いて実施する図書館員による情報利用に関する指導のこと。演習を含む。
内容	図書館の三大資源： 一次資料，二次資料，図書館員 論理演算： AND検索，OR検索，前方一致，後方一致 データベースの検索法： OPAC(オンライン蔵書目録) 図書，雑誌(論文)，新聞記事 複写・取り寄せ(ILL)サービス 引用，著作権，剽窃(ひょうせつ)

2.4 科目関連指導の設計

- ① 図書館員が、学期の始まる2-3週間前に、講義要綱から支援対象とする科目を抽出する。
- ② 図書館員が、①の担当教員に、図書館員による支援の必要性を確認し、実施日を決定する。
- ③ 図書館員は、科目のシラバスを読んだり、教員と打ち合わせをしたりして、課題のテーマについて理解を深め、これに関する一次資料や二次資料、データベースを検討してパス・ファインダーを作成し、Web上で公開する。
- ④ 指導当日には、図書館員が、パス・ファインダーを示しながら、情報の探索法、情報の入手法について説明する。

2.5 科目関連指導の実施の要点

- 課題探求型の課題 (research assignments) を与える科目を重点的に支援する。
- 「教える好機 (teachable moment = テーマを設定した直後)」に支援を実施する。
- 一般的なテーマではなく、科目で与えられた課題のテーマに関する支援を実施する。
- 支援を実施した科目数ではなく、個々の教員の満足度に重点を置く。

2.6 科目関連指導の利点

教員にとっての

- 科目関連指導を受けた学生は質の良い課題を提出するので、成績評価の作業が楽になった。
- 専門分野に関する新しい知識を入手し続けるには多大な労力が必要になる。科目関連指導によって、教員も、専門分野の最新動向を知ることができる。

(いずれも、アールム・カレッジの教員による報告)

2.7 パスファインダーとは

- 情報を探索するための道案内
(path+finder)
- 特定のトピックに関する資料・情報を系統的に集める手順をまとめた一枚もののリーフレットのこと。
- 系統だった調査の手順を示し、さまざまな特徴をもった多様な情報源を案内する。

2.8 パスファインダーの要点

- トピックが大きすぎると利用しにくいことを理解する。
- 各科目や課題の主題を反映させたパスファインダーを作成する。
- 開講年度と科目名を見出しにして図書館のWeb上で公開する。

例) [千葉大学](#), [名古屋大学](#), [三重大学](#)

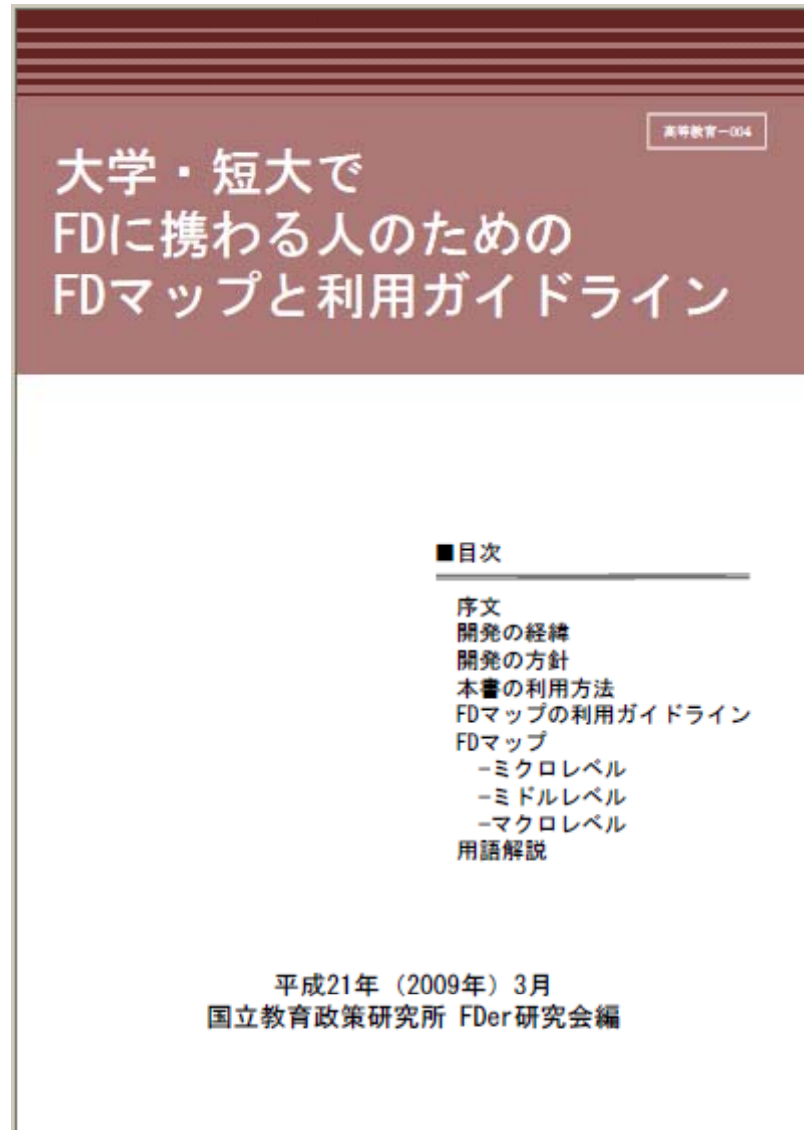
3. 教員に対する教育活動の 支援(教育支援)

3.1 教育支援の目標と方法

主な到達目標

- 教員が，図書館が学習・教育支援機関であることを認識する。
- 教員が，課題探求のプロセスにおける情報利用の注意点と対策について理解する。
- 教員が，課題探求型の授業スタイルを支援する教材を作成できるようになる。
- 教員が，自身の情報リテラシーを向上させる。

3.2 FDマップと利用ガイドライン①



<主な内容>

- FDマップの
利用ガイドライン
- FDマップ
ミクロレベル
ミドルレベル
マクロレベル
- 用語解説

3.3 新任教員の支援

新任教員への図書館サービス案内状の送付(アールム・カレッジ)	
内容	<p>着任が決まった教員に図書館のサービスを紹介した手紙を送付する。</p> <p>授業で必要な文献があればいつでも購入できること、図書館がいつでも支援できることを伝える。</p>
新任教員オリエンテーション(三重大学, 長崎大学)	
内容	<p>新任教員オリエンテーションの一環として、「図書館の利用法」についてガイダンスをする。</p> <p>短時間で、附属図書館がいかに学生の学習活動や教員の教育活動を支援できるのかを伝える。</p> <p>附属図書館のアピール・ポイント(例として、コレクション、建物やスペース、歴史など)を伝えるのもよい。</p>

3.4 教育開発ワークショップ

教育開発ワークショップ(アールム・カレッジ)	
説明	1日規模のワークショップによって、教員と図書館員がレポート課題など課題探求型の課題の設定や指導方法について検討する。
目的	<ul style="list-style-type: none">•教員が情報資源や課題探求型の課題について理解を深める。•教員と図書館員、教員同士が情報交換をする機会を設ける。
内容	<ul style="list-style-type: none">•新しい情報資源と新しい課題•研究プロセスの指導•特定の分野の情報探索法•剽窃(ひょうせつ)

3.5 FDワークショップ

FDワークショップ(長崎大学)	
説明	2時間のワークショップによって、図書館員が教員にパス・ファインダーの構成と多様なデータベースを説明し、これをもとに教員がパス・ファインダーを作成する。
目的	<ul style="list-style-type: none">•教員が、学生の情報探索を支援するツールとしてパスファインダーの存在を知る。•教員が、パスファインダーの役割や構成、情報探索の道具について理解を深める。•教員と図書館員が顔を合わせる機会を設ける。
内容	パスファインダーの説明と演習 各種データベースの説明

3.6 FDガイド

必要な情報にさっとアクセスできるように、
トピック別に背景や要点を簡潔にまとめた1枚もののガイド

三重大学 高等教育創造開発センター 第6号
News Letter

2017年3月23日発行 発行所 三重大学高等教育創造開発センター

教育開発のガイド No.1
「著作権の基本: Introduction to Copyright」

背景とポイント

著作権は、知的財産権(知的所有権)のひとつです。著作権法では、著作物を「原意又は感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの(第1条第1)と定義し、これを保護しています。

これらの権利のうち、著作権は、権利を認許するために、申請や登録を必要としますが、著作権は、こうした手続を一切必要とせず、著作物が創られた時点で自動的に付与される法的な権利とされています(先方式主義)。

情報通信技術の進展や普及により、コンピュータやインターネットが身近な情報伝達の手段となり、情報伝達能力の育成によって多くの教員が所有科目にレポーターやプレゼンテーションを導入し、活用しています。公的な情報の利用と著作権の重要性について学生の理解を促すために、教職員が著作権について、基礎知識を身につけ、適切な活用が可能なようにする必要があります。ここでは、まずは著作権に関する基本的な事項を紹介しています。著作権とは何ぞい、著作権にはどのような権利があるのか、著作権の保護期間がどれくらい、著作物を自由に使用できるのかの範囲が、それぞれについて紹介しています。必要に応じて、学生に教習いただければ幸いです。

著作物の種類

言語の著作物	講演、論文、レポート、作文、小説、詩歌、詩集、俳句など
音楽の著作物	楽曲、楽曲を作り歌詞
舞踏、無音楽の著作物	日本舞踊、バレエ、ダンス、舞踏、パントマイムの振り付け
演劇の著作物	映画、映画、彫刻、マンガ、書、舞台装束など(装束工器具を含む)
建築の著作物	建築的な建築物
地図、図書の著作物	地図、学術的な図解、図表、教科書、立体模型、造形模型など
映画の著作物	劇用映画、テレビ映画、ビデオDVDなどのソフト
写真の著作物	写真、グラフィックなど
プログラムの著作物	コンピュータのプログラム

他の著作物として、二次的著作物、編集著作物、データベース著作物などがあります。なお、次のものは著作物であっても、著作権はありません。
 ① 書物その他の法令(地方公共団体の条例、規則も含む)
 ② 国や地方公共団体または独立行政法人の告示、訓令、通達など
 ③ 裁判所の判決、決定、命令など
 ④ ①から③の複製物や編集物で国や地方公共団体または独立行政法人が作成したもの

名古屋大学教職開発センター
Faculty Guide

学生に的確なレポートを書かせる
Promote Academic Writing

背景と論点

授業でレポートを課した経験のある教員は多いが、授業はコピーレポートで作成したレポート。裏紙不明なレポート、字が小さくても判読できないレポート、先鋒文を課したレポートなどにお目にかかったことがあるでしょう。一方、好むらしい授業のレポートを渡ると、授業の目的が達成されたとはいえない場合があります。授業や研究の目的を踏まえた適切な指導がなされ、かつ適切なレポートを作成する必要がある。そこで、授業の中でレポートを書く方法を、授業の目的に合わせた「アガダック・ライティング」のノウハウを教員に、学生に伝えることが求められます。なお、本ガイドでは平成21年度の教職開発センターで実施されたレポート作成の目的別のレポートワークショップを通じて、教職開発センターが学業支援を推進する取り組みを紹介しています。*サポートセンターに関するお問い合わせは059-223-5111(授業サポート)まで。

実践の手法

- 1. 大学生がレポートを書けない理由**
 - 「〇〇について書く」ということの意味がわからない
 - どういったレポートがよいのかについての知識が足りない
 - 出されたレポート課題と授業で聞いた内容との相違がよくわからない
 - 課されたレポートを完成させてくれないので、どこが評価される、どこが評価されないのを知ることができない
- 2. 学生にレポートを書く準備をさせる**
 - 書くという行為は知的報酬に多くして不可欠の基礎スキルであることを学生に伝える
 - 学術的な文章とはどういった文章なのかを、授業の展開で学生に伝える
 - 基本文法を学生に紹介し、そのコメント・批評を書かせる
 - 卒業論文のレポートや論文を学生に示す
 - レポート作成の事前学習をするガイダンスを学生に紹介する
 - 例) 木下重雄(1981)『国語教育の危機』中央書院
 - 例) 岡田和(2002)『国語教育の危機-レポートから実践まで』NHKブックス など
 - レポート課題に詳しい経験豊富なスタッフがサポートとして授業に行く
 - 対応する質問に対しては疑問を解いて、どのように書くかを考えさせる
 - レポート課題が課された授業を支援する(どこまで支援するかは各担当)
 - たとえば、「自分たちの授業を受けて、これに書くレポートを作成し、研究発表をし、講義の展開から授業の展開までを振り返る」など
- 3. 大学で求められる文章のルールやマナーを学生に伝える**
 - 引用した文章の出典を明記させる
 - 引用に引用することの是非を伝える
 - 参考文献、引用が適切に行われているかを説明する(適切な引用であることを、そして本人の知識や経験に基づいて適切な引用であることを伝える)
 - 口頭発表を奨励したり、発表者への質問時間を設けたりとすることで、発表を促進していく

名古屋大学版 <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/>
 三重大学版 <http://www.hedc.mie-u.ac.jp/edguide/edguide.html>

4. 大学や教員の ニーズの把握

4.1 図書館員の役割

大学の中心＝教育・学習のプロセス

図書館員＝教育・学習プロセスの成果の向上を支援する図書館サービスの“**ファシリテーター**”となる。

所属する機関の学生や教員のニーズを予測した上で、教員に連携をはたらきかける“**事前対策的なアプローチ**”をとる。

教員とのつながり方を開拓する

4.2 大学全体のニーズの把握

大学全体の教育計画

全学の教務委員会の議事の確認

「シラバス」

→学生用の推薦図書ほか学習支援の案内をする

「学習スペース」

→ラーニング・コモンズに関する情報を提供する。

アプローチの対象：

全学の学務部，教務課，理事（教育担当）

4.3 各部局のニーズの把握

3つの方針の「ディプロマ・ポリシー」 図書館と関連するポリシーの確認

「課題探求」等

→課題探求のプロセスと情報利用の
関係に関する情報を提供する。

「初年次教育」

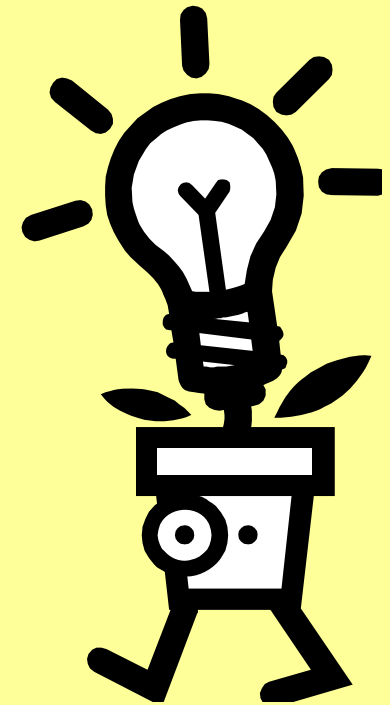
→図書館ガイダンスの案内をする。

アプローチの対象：

各部局の部局長，教務委員，FD委員

課題探求のプロセス

- ① テーマを設定する。
- ② 情報探索の道筋を設定する。
- ③ 情報を探索する。
- ④ 情報を評価（取捨選択）・統合する。
- ⑤ 情報を用いて表現する。
- ⑥ 成果物とプロセスを評価する。



4.4 教員団のニーズの把握

大学全体の学習・教育支援
図書館との関連が深い支援の確認

「**新入生オリエンテーション**」「**新任教職員研修**」

→ 図書館によるオリエンテーションの実施を提案する。

「**FDワークショップ**」

→ 図書館による企画を提案する。

アプローチの対象：

FD担当者，FD委員会の委員，
理事（教育担当），人事課

4.5 教員のニーズの把握

シラバス(講義要綱)

図書館との関連が深い科目の確認

「レポート」「プレゼンテーション」

- 科目関連指導の案内をする。
- パスファインダーの作成を提案する。
- レファレンスその他図書館サービスを紹介する。
- 情報利用プロセスと図書館の関係に関する情報を提供する。

アプローチの対象:個々の教員

5. 図書館員による 教員へのアプローチ

5.1 利用対象への気づき

- 学生の情報リテラシーはどのようなものか？
- 学生の情報探索行動はどのようなものか？
- 十分な学習の成果が得られているか？
- 教員は学習の成果に満足しているか？
- 専門性を活かした高度な図書館サービスを提供できているか？
- 教員は図書館や図書館員にどのようなイメージを持っているのか？
- 教員は図書館をどのように利用しているか？

5.2 アプローチ:学習支援①

- “**課題探求型の課題**” (レポートやプレゼンテーション)を与える科目を主な支援対象にする。
- 科目で与えられている“**課題のテーマ**”を反映させた支援内容にする。
- 学習の効果が最も高いと言われる“**教える好機**”に実施する。
- 各科目に“**カスタマイズ**”した支援をデザインする。

5.2 アプローチ:学習支援②

- “まずはひとりの教員が満足すること”を目指す。
- 各図書館員が“担当する教員を特定”する。(MYライブラリアン)

5.3 アプローチ:教育支援①

- 新任教員へのアプローチに重点を置く。
- 図書館や図書館員が“親しみやすい”ということ的印象づける。
- “面倒くさいという印象”を与えない。
- 参加や利用を“強制しない”。
- “全員を支援しなくてもよい”と考える。

5.3 アプローチ：教育支援②

- 教員と図書館員が連携した授業のモデルを“教員が他の教員に紹介する”機会を設ける。
- “大学や学内の学習・教育支援組織が計画するプログラム”の一部に教育支援を組み入れる。
- FDを担当するセンターや委員会と連携して企画・実施する。

5.4 アプローチ:その他

- “**インフォーマル**”な場で、教員と交流する機会をもつ。(食堂, 交流会, 食事会など)
- 図書館員が, “**図書館外において広く活動する**”(学内講師, 学内の委員会の委員, 学会等における発表など)。
- 「北風と太陽」の**太陽のアプローチ**を目指す。

主な参考文献①

- 中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて』(答申) 2008.12.24.
- 大学教育審議会『21世紀の大学像と今後の改革方策について: 競争的環境の中で個性が輝く大学』(答申) 1998.10.26.
- 科学技術・学術審議会『大学図書館の整備について』(審議のまとめ) 2010.12.
- 川島啓二. 初年次教育の諸領域とその広がり『初年次教育学会誌』Vol.1, No.1, 2008, p.30.
- “私立大学における一年次教育の実際”. 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所. <http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/book/pdf/sousyo4.pdf> (参照2010-08-24).
- 長澤多代「アールム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ」『Library and Information Science』No.57, 2007, p.33-50.

主な参考文献②

- 永田治樹ほか. 今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書:教育と情報の基盤としての図書館. 国立大学法人筑波大学, 2007.3, 157p. <http://www.kc.tsukuba.ac.jp/div-comm/pdf/future-library.pdf>(参照 2011-10-04)
- 日本図書館協会図書館利用教育委員会編『情報リテラシー教育の実践』日本図書館協会, 2010, 180p.
- 国立教育政策研究所, 日本高等教育開発協会 (JAED) 主催の高等教育開発セミナーの配布資料 (2010.9.3.)
- 国立教育政策研究所 FDer研究会編『大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン』国立政策研究所, 2009.3, 26p. 入手先 <http://www.nier.go.jp/koutou/projects/fder/index.html> (参照 2011-10-05)
- Hardesty, Larry ed. Bibliographic Instruction in Practice: A Tribute to the Legacy of Evan Ira Farber. Ann Arbor, Pierian Press, 1993, 157p.

大学教育に関する情報源

学会

日本高等教育学会 <http://www.gakkai.ne.jp/jaher/>

大学教育学会 <http://www.daigakukyoiku-gakkai.org/>

初年次教育学会 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jafye/index.html>

定期刊行物

上記の学会誌, 『IDE・現代の高等教育』, 『大学と学生』, 『カレッジ・マネジメント』, 『BETWEEN』

ASAGAO kyoto-uメーリングリスト <http://kyoto-u.s-coop.net/asagao/>

京都大学高等教育研究開発推進センターに関する最新の情報, 国内の大学教育関係の催し等に関する情報が得られます。